

ペンテコステ(五旬祭)は過越の祭から 50 日目を祝う祭でした。五旬祭は元々初夏の小麦の収穫を祝う祭で、イエスの時代にはシナイ山において律法が授与された日と考えられるようになりました。その出来事は 2~3 節に記されています。「激しい風が吹いて来るような音」あるいは「炎のような舌」と記されています。あくまでも「のような」音、「ような」舌であり、私たちが日常に経験する激しい風、舌とは異なるものです。旧約聖書では、風や炎は神さまの臨在の象徴です。聖霊が降った時に炎のような舌が弟子たち一人ひとりの上にとどまったというのは、まさに神さま自身が彼ら一人ひとりに出会い、働きかけて下さったことを表わしていると同時に、その聖霊の働きが外から与えられたものであることを表わしています。また、聖書において舌は語ることとの関連で出てきます。「炎のような舌」とは神さまからの炎が弟子たち一人ひとりに語る力として与えられたことを示しているのです。そして彼らは他の国々の言葉で話しました。彼らはガリラヤの田舎の普通の人たちです。彼らは学んだこともない国々の言葉を突然話し出したのです。そして注目すべきことは、彼らの言葉を聞いたのはユダヤ人だけ、あるいは異邦人でもユダヤ教への改宗者だけでした。聖霊の働きによって、共同体が誕生しましたが、その共同体は最初はユダヤ人の群れでした。それは神の民イスラエルを受け継ぐものだからです。しかし、その時に弟子たちが様々な国々の言葉で話したということは、この新しいイスラエルが決してユダヤ人だけのためのものではなく、様々な国々の言葉を話す異邦人たちに開かれたものとなっていくということが先取りされていたと著者ルカは示しているのです。

キリストの教会はしばしば船に譬えられます。ノアの箱舟やイエスと弟子たちが乗った舟が嵐に出会った物語などからの連想だと思いますが、この教会という船は聖霊の風を受けることによってしか前に進むことの出来ない帆船です。風は私たちの思い通りに吹かせることは出来ません。自分に注がれている聖霊という風、神さまの促しの中で、イエスと共に歩むことではないでしょうか。ペンテコステの日に起きた、激しい風が吹いて来るような音や、炎のような舌が現れるのを、私たちは聞いたり見たりしたことはありません。しかし、イエス・キリストを信頼し、ここに集っている私たちの一人一人の上に、聖霊なる神さまは今も働いているのです。